

頭の中に出血すれば、意識はなくならなくとも、頭痛へらひはすると思っただろう。

だが、それは、ただの常識というものだ。

75歳のY子さん。昨日、つまずいて転んで、しこたま顎をぶつけた。でも、意識はなくなっていない。手足の麻痺はない。頭痛さえもない。だから、「頭の検査なんかしなくてもよいだろう」と考えるのも常識である。

だが、Yさんは、「ひょっとして、頭の中で出血しているかも?」と、何度も訴える。若い頃なら、「今は、必要ない。今後の経過をみればよい」と突っぱねたかもしれない。が、その時、ワッシーは、なんとなくイヤは予感がした。いや、年若いて気弱になったのか、恐ろしい女性の頼みを断れなかっただけだ。それで、「ご希望通り、CT(コンピュータ断層撮影)の検査をしたというわけである。

と、な、なんと。頭の左側の脳の表面に、3〜4ミリの薄い急性硬膜下血腫が見付かったではないか。出血は、脳の表面と硬膜の間につながる架橋静脈が裂けたせいだろう。症状はなく、血腫も薄い、手術の必要はない。だが、薄いとはいえ血腫がで

ているのだ。なぜ、頭痛さえしないのだろう。

実は、そういうことは、高齢者では稀ではないのである。年を取ると、脳は萎縮する。硬膜下腔(硬膜と脳の表面の間)が拡大する。脳が動きやすく、架橋静脈が傷つきやすいのだ。静脈だから、比較的少量の出血ですむかもしれない。小さな血腫なら、硬膜下腔が広いので、脳圧も高くない。頭痛がなくても不思議ではないのだ。

だが、血腫は、やがて、急性から慢性に移行して大きくなるかもしれない。で、検査をしないでいて、脳の症状が急に起きたら。おうコフ。患者さんのご希望には、理屈抜きでお応えしておいた方がよいかも。コフ。

(石黒修三「いしへろクリニック・脳神経

外科医…12/19 北國新聞掲載)